

お騒がせマリッジ

もくじ

お騒がせマリッジ	5
番外編 宝条瑛知のあるご機嫌な一日	219

お騒がせマリッジ

第一戦 やっぱり男なんて大嫌い！

『……こうしてお姫様と王子様は結ばれ、一生二人で幸せに暮らしました。おしまい』

小さい頃、私は絵本の中の恋に夢中だった。

『お母さん、もう一回読んでえ！』

『また？ 夏奈は絵本が大好きね。……もう一回だけよ？』

『うんっ！』

いつか私も大好きな人と、素敵な恋をするの。

そんな夢を胸に抱き、ページがポロポロになるまでお気に入りの絵本を眺めていた。

小さい頃はお母さんに読んでもらっていたけれど、そのうち字が読めるようになって……私はますます恋物語にのめり込んでいった。

でも、そこに描かれているのは、現実じゃない。

しよせんフィクションに過ぎないって気づいたのは、いつだったろう。



「聞いてよ、夏奈！ お父さんったら、また浮気したのよっ！」

「へえー……」

「今度の相手は家の近所にある本屋の店員！ しかもすごく若い子だったのよ！ もう、いい歳してバカじゃないのっ！」

こんな風に母から父の浮気について聞かされるのは、もう何度目だろう？
両手と両足の指では足りないのは確かだ。

「じゃ、今度こそ慰謝料ガツポリ取って別れてやったら？」

私、白咲夏奈はテーブルに肘をつき、コンビニで買ってきたお煎餅をボリボリとかじりながら、傷心中の母に適当なアドバイスをした。

「夏奈はいつもそればかり……！ 別れずに済む方法を考えてちょうだいっ」

「ていうか、なんで別れるっていう選択肢がないの？」

残業で疲れたから、リビングにある大きなテレビでバラエティでも見て寛ごうと思ったのに、まさかこんな話を聞かされるハメになるとは……

「……もう、夏奈は冷たいっ！ お母さんがこんなに悩んでるっていうのに……冷凍庫に入ってる水よりも冷たい娘よ！ このブリザード娘！」

「いやいや！　そこまで冷たくないでしょっ」

こんなことなら、テレビなんか見ようとしなくて、さっさと自分の部屋に引っ込めばよかったなあ。しかもチャンネル争いに負けて、バラエティじゃなくてドラマを見ることになっちゃったし。

「男は浮気する生き物なんだから仕方ないって！　母さんもいちいち腹立てないで、見逃してやりなよ。俺の今カノはそこんとこ、ちゃんんと理解してくれるよ？」

チャンネル争いに勝った兄は、スマホをいじりながらソファにふんぞり返り、私よりもさらに最低なアドバイスをした。

見てないならチャンネル変えてよ。会社の女性社員がハマってるドラマだから、チェックしておくって何!?　この女好きめ！　お茶を飲みながら、私は兄をジロリと睨む。

ちなみに私の三つ年上の兄である育也は、父の経営する製薬会社に役員として勤めていて、将来は跡を継いで社長になるらしい。

社内の女性社員に手を出しまくっているそうで、そのうち刃傷沙汰に巻き込まれないかちよっと心配……は、してない。もしそうだったとしても、自業自得だ。

「お父さんも、育児も最低！」

さっきまでドラマを真剣に見ていた妹の結奈は、眉を吊りあげて怒っている。

「お姉ちゃんはまだ少しお母さんに優しくしてあげてよ。お母さん、元氣出してね！　あたし、お父さんが反省するまで口利かないから！」

結奈は大学生なのに中学生ぐらいにしか見えない幼い顔立ちだから、声を荒らげたところでちっ

とも怖くない。

「結奈！　あなたたつてば、なんていい娘なのっ！　私の子供はあなただけよっ！」

母は結奈にヒシツと抱きつき、わざとらしく泣いている。家族の中で母の愚痴を真面目に聞くのは、結奈だけなのだ。

「お父さんつたら、どうして浮気を繰り返すんだろうね。お母さんのこと、『愛してる』っていつも言ってるのに……」

「バーカ。だから何回も言ってるだろ？　父さんに限らず、男はみんな浮気する生き物なんだって。従妹の奈緒ちゃんだって、この前旦那に浮気されたろ」

「それは旦那さんが悪くて……」

「今の旦那だけじゃないだろ。あいつ、結婚前に付き合ってた彼氏にだって、浮気されてたじゃん。お前覚えてねーの？」

考え込んでいる結奈を見て、兄はなぜか得意げに語る。

「そ、それは一部の人で……」途な男の人だつて絶対いるもん！」

食い下がる結奈を、兄は鼻で笑う。

「バーカ。男はみんな浮気するんだって！　つかさ、お前だつていくら好物でもチョコばっかり食いつけてたら飽きるだろ？　たまにはしょっぱいものだつて食いたくなるだろ？」

「まあ、うん……たまにはしょっぱいもの……ポテチも食べたくなるけど……」

「ほーら。な？　そういうことだよ」

浮気をお菓子にたとえるな!

何、その、上手いたとえ言いました、みたいな顔! すっごく腹が立つ。

好きになった人が、自分だけをずっと見ていてくれるなんて限らない。
他の女の子に心変わりしないなんて言いきれない。

女癖の悪い父と兄、そして男に泣かされ続ける母と従妹いとこに、私は囲まれて育った。だから、早々に男の人への憧れは捨て去った。

そして男って最低……と思いつながら生きていたら、いつの間にか二十四歳。年齢イコール彼氏いない歴だけど、これからも彼氏を作る予定はない。

彼氏も旦那もいらぬ。恋愛なんてしたくない。

運よく大手企業に就職できて、すでに老後の資金もコツコツ貯めているから大丈夫。きつと一人であって生きていけるはずだ。

お茶のおかわりを取りに行くためにテーブルに手をついて立ちあがると、手元がガタンと大きく揺れた。

「あれ? なんかテーブルの脚、グラグラしてない?」

「そうなのよ。お父さんの浮気に腹が立つちゃってね」

「う、うん?」

浮気とテーブルのグラグラに、どんな関係があるのだろう。

「持ち上げて、お父さんに投げつけてやったら脚がグラグラになっちゃったわ。新しいの買わないとダメかしらね?」

な、投げたの!?

ちなみにテーブルは五人で座れるタイプのもので、決して軽くはない。御年、五十五歳の母がどうやって持ち上げたのだろう。

ふと近くの壁を見ると、少し……いやかなりへこんでいた。

今朝父はピンピンしていたから、どうやらダメージを受けたのは浮気した父ではなく、テーブルと築二十五年のこの家だったらしい。

「わざわざ買わなくていいよ。こんなのすぐに直せるし」

まだそこまで遅い時間じゃないことを確認して、私は部屋から工具箱を持ってきた。この程度の修理なら、騒音で近所迷惑になる心配はない。

「本当に直せるの?」

「うん、これくらいなら余裕だよ」

心配そうに覗きこむ母を横目に、テーブルの脚の部分の古い釘を外して、新しい釘を打ちこんだ。

「あ、塗装が剥がれる。これは次の週末に直しておくよ。どうせなら気分を換えて新しい色にしてみる?」

「そんなことまでできるの!?!」

「うん、できるよ。何色にするか決めておいて。持っていない色なら買い足さないといけないから。これ、カタログね」

「助かるわあ〜！ あ、じゃあついでにキッチンのとこの棚も直しといてくれる？ 少しガタガタしてるのよ」

「うん、いいよ」

私の趣味は日曜大工だ。力仕事だってお手の物。だから男に頼らなくても生きていける。

私は男となんて関わらず、これからも心穏やかな日々を過ごしていく。

——と、思っていた矢先のことだった。



「すまない……………」

金曜日の夜、珍しく早く帰ってきた浮気者の父は、着替えもせずにスーツのまま土下座していた。

「えっ！ お父さん、何してんの？」

しかも母ではなく、なぜか私に。

「……夏奈に、頼みがあるんだ」

嫌な予感しかしない。土下座までして頼みたいことってナニ？

「やだ。き、聞きたくない……………」

断つても、父は頭を上げようとしない。

「そんなことを言わずに……………頼む……………」

「……わ、わかった。一応は聞くけど、引き受けるかは内容次第だから。それでもいいなら、どうぞ？」

父は一瞬顔を上げて嬉しそうな表情を見せ、またすぐに頭を下げた。

「ありがとう、夏奈！ ……実はな、宝条さんほうじょうの次男と結婚して欲しいんだ……………」

「……………は!？」

唐突すぎる話に、私は口をあぐり開けたまま、閉じることができない。

わざわざ家族みんなをリビングに集めるから、ついに熟年離婚？ と思っていたのに、どうして

こんな展開になるの!？」

「実はさー、うちの会社潰れそうなんだわ」

週末は女と遊び歩いていて、いつもは家にいない兄が、スマホをいじりながらポツリと呟つぶやいた。

「えええええ!? お兄ちゃんの女癖が悪すぎるせい!? 会社潰れそうって、一体どんな問題起こ

したの!？ まさか手を出した女性社員たちに集団で訴えられちゃったとか!? 最っ低ー!」

「育也、あんたって子は……………」

「育兄、最低……………」

女性陣に冷たい眼差しを向けられ、兄は慌てて首を左右に振って否定する。

「いや、オレのせいじゃねーから！ 業績不振で、資金繰りがヤバいんだっての!」

業績不振とは、初耳だ。

「うちが倒産しそうだからって、なんで私が宝条さんって人と結婚することになるの？ というか宝条さんってどこの誰!？」

「……お前なあ、自分んちがやってる会社の親会社ぐらい覚えとけつつーの。宝条さんは、宝条グループのトップ」

狼狽する私に、兄がジトリと呆れた視線を向けてきた。
お兄ちゃんだけには呆れられたくないし!

「で、うちの会社が潰れそうなことと、宝条グループの次男と結婚することと、どんな関係があるの?」

私の質問に、父が土下座したまま答える。

「今日、援助を頼みに行ったら、宝条さんちの次男と、夏奈か結奈のどちらかが結婚するなら、会社を立て直せるだけの援助をしてくれると、約束してくれたんだ」

勝手に約束してきちゃったってこと!? というか……

「……む、む、娘を身売りする気なの!？」

驚愕を通り越して呆れる私に、兄はあっさり頷いた。

「結奈はまだ大学生だし、するとしたらお前だろ。ってことで、一つよろしく!」
流しに溜まつてる皿洗つといてね! みたいなノリで言われて、カチンとくる。

「サラツと言わないでよ! この馬鹿兄貴!」

お兄様に向かって馬鹿とはなんだ、とか騒いでいるけれど無視! とりあえず土下座したままの

父から、詳しく話を聞くことにした。

「それで、宝条さんちの次男ってどんな人?」

「下の名前は瑛知で、歳は三十三だ。次男で跡取りではないから、結婚しなくても問題はないんだが、三十歳を過ぎても結婚していないのは、宝条家としては体裁が悪いそうだな……」

近年は晩婚化しているから、そんな男性はたくさんいる。それなのに古い考えにとらわれているなんて、すっごく面倒くさそうな家!

宝条グループは百年以上の歴史がある製薬会社で、国内外にいくつもの子会社を持っているそうだ。跡取りではないにしろ、そんないい家柄の次男坊なら引く手数多のはず。それなのになぜ潰れかけた会社の娘を妻にしたいのだろう。

しかも私は自分で言うのも悲しいけれど、容姿端麗なわけでもないし、学歴だって普通。取り立てて特筆すべきところなんてない。そんな女を妻にしたい理由は一体何!?

怪しい。絶対に怪しい!

「その瑛知って人、生理的に受けつけないぐらい不細工なの? それともすっごい性癖があるとか? 大切な娘を嫁にやるつもりなら、もっと情報をちょうだいよ!」

行く気なんて、少しもないけど!
「すまん。今日約束したばかりだから情報はほとんどない。あ……せ、性癖はわからんが、かなりの美丈夫らしい」

びじょうふ?」

ますます怪しい。お金持ちでイケメンなら、やっぱり引く手数多あまたじゃない。女の子選び放題のバ
イキング状態でしょ？

「……それで？」

父に顔を上げてもらい、じっと目を見つめる。すると父は居心地の悪そうな顔で、ポツリと答えた。
「実を言うとな、かなりの変わり者らしいんだ」
ほら、きた。やっぱり問題アリだよ。

「や、やっぱり変な性癖が……」

「お前なく……いい加減、性癖から離れるよ」

兄が眉を顰ひそめて、ため息をつく。

傍観ぼうくわん者は黙もくってて！ と言いたくなかったけれど、今そんなことを言ったら間違まちがいなく面倒めんどうなこと
になる。今は喧嘩けんかしている場合じゃないし、グツと堪こえた。

「安心してくれ。その点は心配ない」

「どういふこと？」

結婚するということは、……想像したくないけれど、夜の生活も求められるだろう。さあ、お父
さん！ 私をどう納得させるつもり？！

「瑛くんが結婚する条件として出したのは、『別居』だ。しかも緊急時と仕事絡みのパーティー
等の同伴以外は顔を合わせることも、連絡を取り合うこともしたくないらしい。……つまり、形だ
けの結婚だ。ちなみに次男だから子供を作る必要もないということで、夜の生活もナシにしたい……」

ということだ。つまり、その……だな。性癖の心配はしなくても問題なさそうだけど

性癖うんぬんに関してはさすがに言いづらかったらしく、父の声が小さくなる。

「どうだ？ お前は一生結婚しないといつも言っているが、悪い話じゃないだろう？」

いや、悪い話とかいい話の問題じゃなくて……

「お前の歳なら、周りにも結婚している子がいるだろう？ それにもう数年経たてば、『私も結婚し
たい！』とか思うようになるんじゃないか？ それなら、今……」

……そもそも私の男の人に対する夢を打ち砕いたのは、誰だかわかっているのだろうか。ムカム
カしてきて、胃のあたりが気持ち悪い。薄くなってきた頭の毛を全部むしり取ってやろうか！

「周りなんて関係ないし、私、未来永劫みらいえいじゅう結婚したいなんて絶対思わないし！」
キツパリ言い切ると、兄が小さくため息をついた。

「お前が嫌なら、結奈に頼むしかないか……まあ、十八歳過ぎてるし、法律的には何の問題もない
けど……ちよーつと、気が引けるよな」

私ならいいってのか！ この最低兄貴！

怒りにワナワナ震えていると、結奈が目には涙をいっばいためながら頷うなずいた。

えっ!? なんて頷うなずくの!?

「わ、わかった……仕方ないよね。このままじゃ、会社潰れちゃうし……大変だもんね。あたし、
いいよ。け、結婚……する」

「えっ!? な、結奈？ ちょっと待って！」

小さい頃から素直で純粹で、思いやりのある優しい子だと思っていたけれど、まさか承諾するなんて！

「会社立て直すの……頑張つてね！ あたし、大学生だし、頭悪いからあんまり役に立たないかもしれないけど、お手伝いできることはなんでもするから、言つてね！」

「ちょよ、ちょよ、ちょっと待つてば！ 待ちなさい！ 結奈が結婚なんて絶対にダメ！」

それだけはダメだ。私は恋愛を諦めてはいるけど、結奈は諦めてない。むしろ素敵な恋に憧れているのだ。

結奈が素敵な恋愛が描かれた少女漫画や小説をたくさん持つていて、どれもシワシワになるくらい読み込んでるの、お姉ちゃん知ってるんだから！

「お姉ちゃん？」

結婚は嫌だけど、会社が潰れたら家族が路頭に迷う。私は勤め先の会社からお給料をもらっているし、一人ならやつていける。でも、父の収入に頼っている母と結奈は生活できなくなってしまう。それに浮気者の父と女癖が悪い兄も、一応家族だ。捨てるわけにはいかない。

でも、でもでも！ 私が……結婚!?

「じゃ、お前が結婚してくれんの？」

「……っ……そ、それは……」

いや……いやいやいや！ 結婚なんてしたくない！ 形だけの結婚だろうがなんだろうが、結婚は結婚じゃない！ 私は一人で生きていくつて決めたのに！

「お、お姉ちゃん、無理しないで。あたしは大丈夫だから」

結奈の目から涙がポロリと零れ、カーペットに染みを作つていく。

いや！ 無理してるのは、どう見ても結奈だから！

「できないなら茶々入れんなよ。結奈、頼むな」

「お父さんが不甲斐ないばかりに、すまないな……結奈……」

「……うん……まかせて……」

消え入りそうな声で結奈は胸をトンと叩き、悲しそうな笑みを浮かべている。

ダメ！ それだけは絶対にダメ！

「ま、待つて言つてるでしょ!？」

自分でもビックリするぐらいの大声が出て、耳がキーンと痛くなった。

「……わ、わかったよ！ すればいいんですよ!? 私が結婚する！ 結奈が結婚する話はナ

シ！」

「お姉ちゃん、でも……」

キョトンとする結奈の涙を、私はティッシュで拭つてあげた。

「いいからあんたは黙つてなさい」

結奈はお人好しだから、小さい頃からいつも貧乏くじばかり引かされている。このまま放つておけるか！

「お、マジで？ よかったー。さすがに結奈は可哀相だしさ」

兄は相変わらずスマホを離さず、軽い調子で笑っている。

……前言撤回。このクソ兄貴だけは路頭に迷ってよし！ どぞの女のヒモにでもなればいい。兄のことだから『この生活もなかなか楽しいな』なんて言い出しそうだ。

「……そ、その代わり、条件は絶対に守ってもらうからね！ わかった!？」

こうして、一生男と関わらずに生きていこうと誓っていたのに、私の結婚はあっさり決まってしまうた。



それからうちの父親と宝条さん側が話し合い、私と瑛知さんそれぞれの都合がいいときに顔合わせをして、そのまま婚姻届を出すということになった。

夫になる宝条瑛知さんはかなり多忙な人らしく、約一ヶ月経った今も、私は『白咲』姓のままだ。彼が一生忙しければ結婚せずに済む。このままずーっと忙しければいいのに！ と思っていたのだけれど、とうとう明日の土曜日に顔合わせをすることが決まってしまった。

ヤケ酒したい……

そんなやさぐれた気持ちで仕事をしていたら、制服のポケットに入れていたスマホがメールを受信して、ブルブル震えた。

高校時代の友達から、飲みのお誘いだ。

「……よっしゃあ！」

すかさず『絶対に行く！』と返事を打ち、定時で上がれるように仕事に精を出した。こんな日は、飲まなきゃやってらんない！



仕事を終えた私は、高校時代の友達一人と一緒に、ビルの最上階にあるオシャレなバーに来ていた。最上階だけあって夜景がすごく綺麗。宝石箱をひっくり返したって表現がピッタリ。

そして私が飲んでるのは、ブルーのグラデーションが綺麗なカクテル。両隣にいるのは、高校時代という青春を共に過ごした里美と志穂。

独身最後の夜。ああ、なんだかセンチメンタルな気分になっちゃ——

「まさかあ、夏奈が結婚するなんてねえ……っ！ ついこの間まで『一生結婚しないっ！』って言ってたのに……裏切り者っ！ そのカクテルよこせーっ！ アタシが飲んじやうっ！」

「いやいや、それももう二十回ぐらい聞いたし。ていうか、それ以上飲んだらヤバいから！」

——ちっともセンチメンタルになれないでいた。

私がカクテルを奪い返すと同時に、里美が志穂にお水を差し出す。

「弱いのに飲み過ぎるから悪酔いするんだよ？ ほら、もうお酒じゃなくて、水飲んで」

「やーよ。まだ飲むう！ あはっ……アレ？ あそこにイケメンスーツ軍団がいるよっ！」

志穂はお水を飲むことなくカクテルを呷ると、フラフラと窓際のテーブル席へ向かう。そこには志穂の言う通り、容姿端麗な男性三人組が座っていた。

「ちよ、ちよっと、どこ行くのっ!？」

里美と一緒に慌てて追いかけたけれど、時すでに遅し。

「こんばんはあく！ 私たちい、あっちで女の子だけで寂しく飲んでるんですけどお、一緒に飲みませんかあ？」

もう、ナンパしたあとだった。

いきなり逆ナンされた男性グループは、呆気にとられている。

「す、すみませんでした！ 少し悪酔いしてしまったみたいで……」

慌てて間に入って謝ろうとしたら、ひとときわ目を惹く容姿をした男性にジロリと睨まれた。

目つきが鋭く、細いフレームの眼鏡をかけているせいで、なおのこと冷たい印象を与える。清潔感のある黒髪に、高い鼻梁と形の整った薄い唇——どこをとっても完璧としか言いようがない。

「謝罪は結構です。悪酔いしているようが、シラフだろうが、言い訳になりません。迷惑なことには変わりありませんから」

「はっ……!？」

彼の言うことはもつともだ。もし自分が志穂と同じようなことを酔っぱらった男にされたとしたら、同じく迷惑だと思っだろう。

「ただ、言い方つてもんがあるでしょ!？」

「あの……っ……むぐ！」

「本当にすみませんでした！ ほら、戻ろう！ ね？」

里美は思わず文句を言いそうになった私の口を手で塞ぎ、さらに志穂の腕を掴んで席へ戻る。とんだ巻き添えを食らい、かなり後味が悪い独身最後の夜になった。

もつと綺麗な思い出にしたかったのにっ……!？」



失礼イケメンから攻撃も食らったことだし、今日は節約しないでタクシーに乗って帰ろうと思っていたら、財布にあと千円しか入っていないことを思い出した。

下ろし忘れて、飲み会分のお金しか入ってなかったんだっ!

「くーっ、最悪……!？」

急げばまだ終電に間に合いそうだ。私は駅へと急いでいた。チラチラと腕時計を見つつ、前を歩いている人たを次々と抜いていく。

この調子だったら間に合う。そう思った瞬間、なんとパンプスのヒールが溝にはまって、ポキッと折れてしまった。

運が悪いときは、とことん悪い。

「う、ひゃっ……!?! んぶぶっ!？」

バランスを崩した私は、目の前を歩いていた背の高いスーツ姿の男性に顔からぶつかってしまった。顔を強打したせいで、鼻がツンと痛み、涙が滲む。

やってしまった……

男性のスーツには、私のグロスとファンデーションがベツタリ付いている。

「ひいっ!? す、すみません……!」

男性はぶつかられた衝撃に驚いて一瞬立ち止まったけれど、振り返ることなく再び足を進めようとする。

ええっ!? ちょ、ちよっとー!

彼は背中に化粧が付いていることに、全く気づいていない。いや、背中だから気づいていたら驚くけど、普通は振り返ってどんな状況か確認するよね?

ヒールの取れたパンプスを履き直して、『待って下さい』と言いながら追いかけるけど、全然振り向いてくれない。

「待って下さい! すみません! ちょ、ちよっと待って下さいっ!」

やっこのことで腕を掴むと、男性はピタリと足を止めた。

「……何か?」

振り返った彼を見て、絶句する。

私がぶつかっただのは、なんとバーで一喝されたばかりの、あの失礼イケメンだったのだ。

よ、よりによって、こいつにぶつかるとは——!

「また貴女ですか……」

「え、えーっと、すみません。わざとじゃないんです。あ、あの、今ぶつかった拍子にですね。あなたの背中に化粧を付けてしましまして……」

失礼イケメンは眉を蹙め、大きなため息をついた。

「貴女がどれだけ男性に馴れているのかは知りませんし、知りたくもありませんが、迷惑です。他を当たって下さい」

「……は!?」

まさか、またナンパしてると思われた!?

頭に血が上って、血管がブチッと切れる音が聞こえた気がした。

「先ほどは不快な思いをさせてしまって、申し訳ありません。でも、今のはまったくもって偶然です! 相手を選べたなら、あなた以外の人にぶつかってますしっ!」

「へえ、そうですか」

へえって!? 信じてないでしょ!

また頭の血管の二、三本が、ブチブチッと切れる音が聞こえた気がした。

「いやいやいや! 本当にナンパじゃありませんよ!? とても素晴らしい容姿を持っていらっしやるようなので、いつも苦勞なされているのかもしれないませんが、少々自意識過剰じゃありません! 私は綺麗な顔立ちを見るのは、芸術品を鑑賞する意味では好きですけど、恋愛感情を持って見たことは一度もありませんし、今後ありませんから!」

鼻息を荒くしながら捲し立て、睨んでやる。すると、失礼イケメンが目をキョトンと丸くした。

「……女性からそのような言い方をされたのは、初めてです」
小さな声で呟かれ、ハツとする。よくよく考えてみれば、さつきから失礼なことをしているのはこちらの方なのに、つい怒りを爆発させてしまった。

怒らせちゃったかも。いや、これは怒るでしょう！

恐る恐る彼の顔を見上げると、なぜか笑っていた。

なんで笑ってるの!? 怖っ！

「えーっと……と、とにかく、すみませんでした！ 汚れを落としたいので、後ろを向いていただけませんか？」

「後ろを向いた瞬間、刃物でプスリと……？」

「いや、しませんし！ ていうか、早くして下さいっ！」

早くしないと終電がなくなる。自ら彼の背中の方に回り、ティッシュで化粧を拭き取ってみた。

うわぁ、どうしよう……全然取れない。

「まだですか？ 他人に背中を任せるといふのは不愉快極まりないので、さっさとして欲しいのですが」

駄目だ。これ以上擦ったら生地が毛羽立つ。

「あのー……言いくいんですけど、事態は思ったより深刻みたいです。クリーニング代をお支払いしますので、クリーニングに出していただいた方が……」

「はぁ……」

面倒くさそうな返事を聞きながらお財布に手を伸ばしたとき、千円しか入っていないことを思い出して、冷や汗が流れた。

クリーニング代、千円じゃ……た、足りない……よね？

慌ててメモ帳に自分の名前と電話番号を書き、破って差し出す。

「あのー……これを……！」

「なんですか？」

「実は今、手持ちがないんです。クリーニング代をお支払いしたいので、かかった費用をお知らせいただけませんか？ 本当にすみません！」

失礼イケメンは訝しげな表情をするばかりで、メモを受け取ってくれない。

「あのー……？」

「いえ、結構です。クリーニング代も持ち合わせていない気の毒な方に、払っていただくわけにはいきませんから」

「きっ……気の毒!?!」

失礼イケメンは失笑すると、人込みの中に消えていく。

呆気を取られて固まっていたら、完全に彼の姿を見失ってしまった。

「……っ……きよ、今日はたまたまなかつただけで、いつもはありますからー！」

悔しさのあまり叫んでみたけれど、奴に届いているかどうかはわからない。周りの人にジロジロ

見られ、慌ててその場を走り去った。

うう、なんて最低な独身最後の夜なの……！ やっぱり私、男なんて大嫌い！



翌日、私は清楚なお嬢さん風のファッションに身を包み、父と母に付き添われ、宝条家が巖窟にしているという銀座の一流ホテルへ来ていた。

昼食をとりながら顔合わせし、その場で婚姻届にサインをする手筈になっているのだ。

高級レストランのランチ、きつと美味しいんだらうなあ……できれば結婚うんぬんは抜きにして、純粹にご飯を食べに来たかったよ。

沈んだ気持ちでレストランに入ろうとすると、母から待ったがかかった。

「何？ どうしたの？」

「……うーん、宝条さんはこの格好、気に入ってくださいるかしらね？」

「気に入るも何も、条件に合う女なら誰でもいいんですよ？ 問題ないよ」

手持ちの服で間に合わせようと思ったのに、両親から新調しろとしつこく言われたため、上から下まで全て買い揃えたのだ。しかも今日は早朝からわざわざヘアサロンに行かされたから、眠くてたまらない。

母は不安そうに、私の頭のとっぺんからつま先まで何度も見直す。これで五度目だ。いい加減納

得して欲しい。気に入らないところがあっても今からでは直しようがないし、ヘアメイクや服装が素晴らしかったとしても、元が元なのだから、諦めて欲しい。

「ほら、入り口で立ち止まってないで入るぞ。もうすぐ約束の時間だ」

「そ、そうね。行きましょう、夏奈」

「へえい……」

父に続いて店内へ入ると、品のいいウエイターがすぐに声をかけてくる。

「いらつしやいませ。ご予約のお客様でしょうか」

父が苗字を告げると、お待ちしておりました、と個室に案内された。どうやら先方はもう到着しているらしい。

この扉の向こうに、形だけの夫婦とはいえ、私の旦那になる人がいる……

「……っ」

心の準備をするために、深呼吸しようと思ったのに、ウエイターがさっさとノックをして、扉を開けてしまう。

「失礼致します。白咲様が到着されました」

心の準備はゼロ。心臓がドキドキと早鐘を打つ中、うつむきながら両親に続いて部屋に入る。

ど、どうしよう。予想外に緊張してきちゃった。

さっきまでは不安そうな母をなだめていたぐらいだったのに、あの余裕はどこかへ行ってしまった。席に着いても、相手の顔を見ることができない。

「顔合わせまでずいぶん待たせてしまつて申し訳ない。うちの息子の都合がなかなかつかず、迷惑をかけてしまつたね」

「いえいえ、とんでもございません。こちらが娘の夏奈です。不束な娘ではありますが、どうぞよろしくお願い致します」

ちやんと顔を上げて、挨拶しなくちや……

気合いを入れるために膝の上でギュッと拳を握り、静かに顔を上げた。

「は、初めまして、白咲夏奈です。どうぞよろしくお願いしま……」

目の前に座っている人物を見て、私は言葉を失つた。

座つていてもわかるほどの完璧なスタイルに、艶やかな黒髪、そして鋭い印象の目と眼鏡。嫌味なほど高い鼻に、雑誌で『素敵な唇特集』があつたらナンバーワンを飾りそうなほど形がいい唇を持つた芸能人顔負けの美丈夫。

「……貴女は昨日お会いした、気の毒な方ではないですか」

「ほあつ……!?」

そこに座っていたのは、なんと昨夜の失礼イケメンだった。

第二戦 あんたなんて絶対好きにならない!

「可愛らしいお嬢さんだ。うちの息子にはもつたいたいぐらいだよ。な? 母さん」

「ええ、本当に。可愛い娘ができて、私つたら年甲斐もなくはしゃいでしまつたわ」

上等なスーツを着こなした失礼イケメン父と、これまた上等な着物を着こなした失礼イケメン母が品のいい笑みを浮かべる。

「いえいえ、そんなことはございません。とても気の強い娘で……お恥ずかしい限りなのですが」

「まさかうちの夏奈が、こんなに素敵な方のお嫁さんになるなんて思つてもみませんでした」

お互いの両親が会話を弾ませる中、私はたらふくマスカラを付けられた目を見開いたまま固まつていた。一方、失礼イケメン……いや、瑛知さんの方は口元を意地悪そうに歪め、ジツとこちらを見ている。

だれか、夢だと言つて! 戸籍上だけとはいええ、こんな奴が夫になるなんて絶対イヤだ!

「こんな素敵な方が旦那様になつてくれるのに、別居だなんて残念ねえ……」

「なつ……ちよつと、お母さんっ……!」

いやいや、今になつて同居だなんて言われたら、私、窓ガラス突き破つてここから飛び降りるからね!? 着地して、遙か遠くにランナウェイしますよ!?

「こんな素敵人との間に産まれた子供なら、絶対可愛いわよ」

「ちよ、ちよっと！ さつきから変なことばかり言わないでっ！」

すると先方のご両親の目が、キラリと光る。

「そう言っていたけると助かります！ 実はこちらの事情が変わってしまいましたね。実は、うちの長男とその妻が失踪したんです」

「ええっ!？」

ここが高級レストランだということを忘れて、両親と共に大きな声を出してしまう。

「あ、いえ、事件に巻き込まれたなどではないので、心配なさらないで下さい。お恥ずかしい話なのですが、突然『オレは跡は継がない。オレはオレの道を歩む!』と言い出しまして……夜逃げしたあげく一方的に退職届を送りつけてきたので、勘当することにしたんです」

嫌な予感がしてならない。背中に冷や汗が流れ、私はゴクリと生唾を呑み込んだ。

「あ、あの、それって……その、つまり……?」

「つまり、跡を継ぐのは次男である瑛知になります。数日後には社長就任式も控えています。長男夫婦にはまだ子供がいないので、うちには将来にそなえて跡取りになる子供が必要です。夏奈さんには色々条件を出したにもかかわらず申し訳ないのですが、瑛知と一緒に住んで、瑛知の子を産んでもらえますか?」

「な、な……ななな……なな……」

言葉が出ない。

何これ、え、夢? 悪夢? この窓を突き破ったらその衝撃で、夢から覚める?

「そうだったんですか。いやー孫の顔が楽しみですわね! うちの娘は平々凡々ですが、瑛知くんは芸能人のような顔立ちですから、妻の言うようにきつと綺麗な子が産まれますよ!」

うちの父は一切戸惑うことなく、満面の笑みを浮かべている。

は!? 何言っちゃってるの!? 約束守ってよ! 私がこの結婚を承諾したのは、最初に提示された条件があったからなのに!

「不束な娘ですが、どうぞよろしくお願いします」

お母さんまで何言ってるの!? イケメンのオーラにあてられて舞い上がっちゃったの!? いや、確かにすごいイケメンだけど、すごい性格悪いんだよ?

って心の中で呟いている暇はない! 早く何か言わないと、私の未来が真っ暗になる!

「あ、あの……っ……ちよっと待って下さい!」

焦って大きな声を上げると、全員が私に注目する。

うわっ……すっごい見られてる!

一瞬怯んだけど、勇気を出して続けた。

「話が違います! 私が籍を入れることを承諾したのは、最初の条件があったからで、……い、今さらそんなお願いをされても困ります! 一緒に住むなんて考えられません!」

「か、夏奈……何を言い出すんだ……」

それは私のセリフだから!

狼狽する父を、ギツと睨みつける。

子供を産めつて、オブラートに包まずに言えば、つまりエッチしろってことでしょ!?

顔が赤くなるどころか、真っ青になる。

無理! 絶対に無理! だって私、恋愛経験ないし、これからだつてするつもりもないし、つまり未開通……コホン、失礼。しょ、処女なんだから、絶対に無理!

「それに、初めの条件なら了承する女性はいなかったかもしれないませんが、今なら私じゃなくてもいくらだつて相手はいらっしゃるでしょう?」

「確かにそれは……」

瑛知さんのご両親が考え込むのを見て、もうひと押しだと感じた。

よおおおし……っ!

「ですから、この話は……」

勝てる……!

そう確信して、言葉を続けようとした瞬間――

「俺は、夏奈さん以外考えられませんね」

「……は!?!」

胡散臭い笑みを浮かべて、瑛知さんがとんでもないことを言い出した。

「俺は夏奈さんとしか結婚したくありません。他の女性とは結婚する気はまったく起きませんので、観念して俺の妻になって下さい。……というか、なっていただけなら援助しませんよ? たと

えお父様の会社が持ち直したとしても、圧力をかけて全力で潰します」

「はあああ……!?!」

何言ってるの!?! こいつ……!



「妻になんてなるか! 父の会社? 潰せばいいじゃない! やれるもんならやってみなさいよ! バーカ!」

――と、言つてやれたら、どんなにすつきりしただろう。

顔合わせのあと、私は予定通り失礼イケメン……いや、瑛知さんと籍を入れた。

家族を路頭に迷わせることはやっぱりできない。

瑛知さんの希望で結婚式をしないことになったのは、不幸中の幸いだった。

ちなみに理由は『面倒なことはやりたくない』かららしい。私も全く同意見だったけれど、騒ぎ立てて強がっていると思われなくなかったので、『わかりました』とだけ答えた。

そして顔合わせから二週間経った土曜日、私は瑛知さんが元々住んでいた家に引越した。

「こちらを宝条夏奈さんの部屋にしていた構いません。好きに使って下さい」

「……どーも。というか、いちいちフルネームで呼ばないでよ。特に苗字を強調しないで!」

「その顔が見たくて言っているんですよ。宝条夏奈さん」

は、腹立つー……!

瑛知さんの家は、代官山にある高級マンションの一室だった。

緑の中にある五階建てのマンションで、玄関ホールではコンシェルジュサービスが利用でき、二名の警備員が常駐している。

部屋はリビングの他に五つもあって、どの部屋も無駄に広かった。

私にあてがわれた部屋もとても広く、十五畳以上はありそうだ。実家から運んできた私の荷物はかなりの量だったのに、この部屋に運ぶとすごく少なくて見える。

さ、さすが宝条グループの社長の家……!

キョロキョロソワソワしていると、瑛知さんがジッとこちらを見ていた。

「何？」

思わず身構えると、瑛知さんがニヤリと笑う。

「いえ、山奥から都会に出てきて、見る物全てが珍しい人みたいだなあと思いました」

聞かなぎやよかった。腹立つー!

「うるさいな……というか、敬語はやめてくれない？ なんだかむず痒いし、私もとっくにやめてるわけだしさ」

敬語とは、読んで字のごとく敬意を表す言葉つかい。こいつへの敬意など、私の中には存在しない。誰が使うか!

「ああ、俺は敬語がデフォルトなんです。他人や両親、目上、目下にかかわらず」

「……へえ、そうなの？」

やっぱり変わり者だわ、と言いつつもさうになったのを、すんでのところで呑み込んだ。

「ええ、ですから口調を変えろというのは、非常に面倒ですね。なにせ相手が貴女ですし……」

「前言撤回。あんたと話していると腹立つから、改めなくてもいい! っていうか話さない!」

「そうですか。それは助かります」

悪態をつけてやったのに、瑛知さんはなぜかとても嬉しそうに笑う。

わけがわからない。同じ日本人のはずなのに言葉が通じていないのだろうか。誰か通訳の人、呼んでみて!

「……あのさ、ずーっと気になってたんだけど、なんで最初に出した条件が別居と顔を合わせないことだったの？」

私にとっては都合な条件だったけど、一体どうしてそんな条件を出したのか気になっていた。

「俺は、生活スタイルを乱されるのが大嫌いなんです。女性なんて面倒なものに関わらないで、一生独身でいたかったんですよ」

「はあ……」

モテない男性が聞いたら、さぞかし腹が立つセリフに違いない。けれど、過去に女性関係で何か面倒事に巻き込まれたことがあるのだろう。

「ですが、両親が毎日のようにしつこく結婚して欲しいって言うものですから、普通の女性ならば絶対に了承しない条件を出したんです。もし奇特な方がいたとしても、戸籍上夫婦になるだけで、



荷解きを済ませると、いつの間にか窓から夕日が差し込んでいた。

「結構かかったな……お腹空いた」

もうすぐ夕食時——一応戸籍上は妻だし、この家賃や食費、光熱費等は瑛知さんが全て負担してくれるらしいし、食事ぐらいは作った方がいいよね。

「ええーっと、ここから一番近いスーパ―は……っと」

お金持ちの人が食べる夕食って、どんなだろう。

スマホで近くのスーパ―とレシピを検索したら、ドアをコンコンと叩く音が聞こえる。

あ、もしかしてお腹空いたって、夕飯の催促!? まずい。まだ買い物どころか、メニューも決まってるじゃないよ!

「は、はい?」

「夕食ができました。冷めないうちに食べて下さい。リビングで待っていますので」

「……えっ!」

瑛知さんが夕食を作ってくれた!? しかも、私の分まで!? というか待っているって一緒に食べようってこと!?

聞き間違いかと思い、恐る恐る部屋の扉を開くと、すごく美味しそうな匂いが鼻をくすぐる。と

同時に、衝撃の光景が目飛び込んできた。

「何を驚いているのですか?」

「な、何それ!」

なんと百八十センチ以上ある男が、ピンク色のエプロンを着けていたのだ。しかも、フリルやリボンが付いた大変可愛らしいデザインのものだった。

「に、似合わないっ! 激しく似合わないよ!」

「……ファッションで身に着けているのではなくて、服を汚さないために着けているだけです」

「それにしても、なんでフリルにリボン……? ま、まさかそういう趣味が……」

そう言うと、凍りつきそうなほど冷たい目で睨まれる。

「貴女の期待を裏切って申し訳ないですが、そのような趣味はありません。会社の飲み会で行われたビンゴ大会で偶然当たったものです。プレゼントする相手を探すのも面倒ですし、捨てるのはエロではないので、こうして活用しているだけです」

「いや、期待はしてないんだけど……」

瑛知さん自身が使っているなんて、景品を用意した人は思っていないだろうな……

「そんなことはどうでもいいので、さっさとリビングに来て下さい。熱々のうちに召し上がってもらわないと」

「あ、うん、ありがとう。すぐに行く」

瑛知さんと一緒にリビングへ行くと、ダイニングテーブルに美味しそうな料理がズラリと並べら

れていた。

「わ、わわ……」

大きなお肉が入ったビーフシチューに、フランスパンを薄くスライスしてカリッと焼いたガーリックトースト。サラダは、水菜とちりめんじゃこの梅ドレッシングサラダと、トマトとモツツアレチーズのバジルソースサラダと、アボカドと海老のマヨネーズサラダの三種類。全て小さな器に盛りつけられていて、一種類につき二、三口で食べられるようになっていた。

「すごい！ これ、全部瑛知さんが作ったの？」

「俺以外に誰がいるんですか。デザートはカタラーナです。冷凍庫で冷やしてありますから、食べ終わったタイミングで出します」

「デザートまで作ったの!？」

驚愕する私を見て、瑛知さんが首を傾げる。

「ええ、それが？」

「や、なんでもない……すごいなあと思っただけ」

どうやら彼にとつては、食事にデザートはつきものようだ。

瑛知さんはフリルエプロンを外し、席に着く。私は彼の対面に腰を下ろした。

「いただきます！」

「どうぞ。いただきます」

スプーンを手に持ち、シチューのお肉を口に入れる。

に、肉がホロホロ溶けた……！ しかもジューシー……！

しっかりと煮込まれたシチューは、お肉と野菜の味がしっかり出ていて、大げさな言い方かもしれないけれど、ほつべたが落ちそうなほど美味しかった。

「な、何これ、こんな美味しいビーフシチュー食べたことない！ どうなってるの!？」

「お口に合いましたか。よかったです」

「お口に合うどころじゃないよ！ どうしよ。幸せ……美味しい……っ！」

あまりに美味しくて、手が止まらない。

ガーリックトーストの味付けも絶妙だし、サラダもサッパリしていて口の中をリセットできるから、こつてりめのビーフシチューもいくらでも食べられる。

「どうしてこんなに美味しく作れるの？」

お金持ちは毎日外食ばかりしてそうなイメージがあるけど。

「俺の趣味は料理なんですよ。たくさん食べてくれる治験体ができたので、よりよい味を追究できそうです」

デザートのカタラーナを楽しんでいたのに、『治験体』という言葉聞いてスプーンが止まる。

「ち、治験体!? ……なんか急に不味く感じてきちゃったじゃない」

もっと別の言い方はなかったのだろうか。

「不味い……? 味が言葉に影響されてしまうとは……まだまだ研究が必要そうですね。明日からはもっと頑張ります」

瑛知さんが不機嫌そうに、少し下がった眼鏡を指先で上げた。

「えっ！ 作ってくれるの？」

今日の夕飯だけじゃなくて、明日も！

「夏奈さんは朝食を抜くタイプですか？」

「ううん、しっかり食べるタイプだけど、明日の朝食も作ってくれるの？ 私、一応戸籍上は妻だし、家賃や光熱費も負担してもらってるからさ、食事くらいは作ろうかなって思ってたんだけど……」

「いえ、結構です。俺は自分の生活スタイルを乱されたくないし最初に言いましたよね？ 自分以外の人間に聖域を荒らされたくないんです」

「聖域？」

何それ。

「キッチンのことです。ですから、料理は一切しなくていいです。というか、しないで下さい」
「やっぱり変な奴……。変な言い方せずに、素直にキッチンって言えばいいのに。」

「えーっと、わかった。聖域……ぶふっ……キッチン、荒らさないようにするから安心して」
「耐え切れずに噴き出してしまったけれど、瑛知さんは全く表情を変えない。」

「ええ、そうして下さい」

「あ、でも、作ってもらったし、食器洗いぐらいはし……」

「……なくていいです。食器洗い機がありますから」

聖域……もといキッチンにはとことん入られたくないらしい。料理が趣味だったなんて意外だ。



そして瑛知さんは約束通り、翌日も食事を作ってくれた。どれも涙が出そうになるほど美味しく、こんなレストランがあったら、絶対毎日通うだろうなと感心してしまった。

「お、おいひい……」

「昨日のリベンジはできていますか？」

夕食のチーズ入りロールキャベツを頬張りながら、私は頭が取れそうなほどにコクコクと何度も顔をうなずいた。

「瑛知さんって性格は最悪だけど、料理は最高だねっ！」

「そうですね。ありがとうございます」

褒めつつも嫌味を込めたんだけど、まったくもって効いていないらしい。料理を褒められて嬉しそうだ。

変な奴！ でも、本当に美味しい。

私がトロトロのチーズと肉汁たっぷりのロールキャベツを頬張った瞬間、瑛知さんが口を開いた。
「ところで夏奈さん、次の排卵日はいつですか？」

「ふぐっ……!? ……ゴホッ……ゲホゲホッ……!!」

いきなりのセクハラ発言に、美味しいロールキャベツが喉に詰まる。水を一気に飲みしてロールキ

ヤベツを押し込み、キツと睨む。

「へ、変態！」

瑛知さんはフウ、と呆れたようなため息をつき、空になった私のグラスにミネラルウォーターを注いだ。

「変態とは心外ですね。なぜ俺たちが結婚して、同居することになったか、もう忘れたんですか？」
忘れられるわけではない。

「子供、でしょ？ 忘れてないけど、いきなりそういうことを聞くと……ど、どうなの？」

「子作りに排卵日の把握は不可欠でしょう？」

「そ、それは……そうだけど……」

そうかもしれないけど、排卵日、排卵日って何回も言わないでよ！ 『子供が得意やすい日』とか、もっと何か別の言い方があるでしょうに！

子作りの具体的な行為を想像すると、気まずくて彼の顔を見ることができない。

一生未開通……失礼！ 体験しないまま生涯を終えると思っていたのに、まさかこんなことになるなんて……

うろうう、嫌だ……！ 絶対嫌っ！ いくらイケメンでも、絶対に嫌っ！

「それで、いつなんですか？」

絶望的な気分になっているところに、さらに追い打ちをかけられる。

……でも……排卵日って、いつ来て、いつ終わるの？

生理と違って今まで把握する必要がなかったから、全然わからない。

「え、えーっと……」

最終生理開始日を記入すると、次の生理開始日を予測してくれるスマホアプリを登録していたことを思い出した。

そうだ！ 確かあれには、排卵日も調べられる機能が付いていたはずだ。

ポケットに入れていたスマホを取り出して調べてみると、一番妊娠しやすいのは次の日曜日からだと表示されていた。

早っ……！ そんなに早く心の準備をしろと！

今月は終わったってことにしちゃいたい。というか、そうしようかな……

そんなずるがしこいことを考えていると、瑛知さんにスマホを取られてしまった。

「あーっ！ ちょ、ちよっと、返して……っ！」

「何を見ているかと思えば、こんな便利なアプリがあるんですね……なるほど、次の日曜日ですか
み、見られた。

もう、ごまかすことは不可能だ。

「では、次の日曜日に仕込むとしますか」

「仕込む？ りよ、料理みたいな言い方しないでよ！」

思わずツッコむと、瑛知さんがニヤリと笑う。

「では、言い直しましょうか。次の日曜日、避妊せずにセックスして、中出しを——」

「言い直さないで！ この変態っ！ 変態っ！ ド変態ーっ！」

顔を熱くしながら捲し立てると、瑛知さんはなぜか満足気に笑う。

だ、誰か！ 本当に通訳呼んで！ 外国語が話せる人じゃなくて、動物の心がわかる人を呼んで！

こうして、私の死刑執行日——じゃなくて、初体験の日が決まったのだった。



『すつごく痛かった。でも、大好きな彼と一つになれて嬉しかったデス！』

大好きじゃない彼との場合は、ただ痛いだけってこと？

『二度としたくないと思っただけど、何度もしてるうちに気持ちよくなってきちゃった！』

したくないって言いつつ、結局何度もやったんかい！

『初めてなのに全然痛くなかった。本当に処女だったのか？ って疑われて、喧嘩になって別れちゃった』

別れられたら、どんなにいいか！

月曜日——

夕飯を終えて部屋に戻った私は、仕事帰りにコンビニで買った雑誌を読んでいた。初体験特集が載っているそれを、いちいち心の中でツッコミを入れながら読み進める。

「うー……やだよだ！ あいつとなんて、したくないいーっ！ 痛いのだーっ！」

ベッドの上で悶絶しても、状況は変わらない。

喉が渴いたので冷蔵庫にミネラルウォーターを取りに行こうとしたら、瑛知さんがシステムキットの棚の前で、顎に手を当てていた。

どうやら何か悩んでいるようだ。

こいつと、日曜日には……

いやらしい想像をしてしまい、慌てて頭を振る。

馬鹿じゃないの!? 思春期の男子じゃあるまいし！

「ねえ、どうかしたの？」

何気なく声をかけると、瑛知さんはすごく面倒くさそうな顔をして振り返った。

「いえ、別に」

「そう？ 何か悩んでるように見えたけど……」

「はあ……」

私の言葉をため息で遮った瑛知さんは、気だるそうに眼鏡を上げる。

「あの、余程の用事があるとき以外、構わないでいただけますか？ うざったいので。それに頻繁に会話を交わすことで、好きになられたら困りますから」

「……は!?」

呆気に取られて、一瞬言葉の意味が理解できなかった。グンと頭に血が上る。

「好きになるわけじゃないでしょ!? それに声をかけたのだって、あなたに構いたいからなんかじゃないで、そこどいて欲しかっただけだし! デカイ図体で冷蔵庫の前を塞がないでよ! 開けられないじゃない!」

フンツと鼻を鳴らし、大きすぎる冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。このまま部屋に戻るのはいかかかったような気がするので、リビングに留まってやることにする。

捲し立てたせいで、余計に喉が渴いてしまった。

ソファにどっかり座ってミネラルウォーターをゴクゴク飲んでいたら、なんだか息苦しさを感じた。

ああ、そうか。今日は少し寒いから、エアコン付けてたんだ。なんだか酸素が薄い気がするし、少し空気の入れ替えをしたい。

エアコンの電源を切り、リビングの大きな窓を開けた。

「は〜……生き返る!」

ちよつと寒いけれど、新鮮な空気が美味しい。

すると、ブブブという音と共に、何か塊のようなものが部屋に飛び込んできた。

「うひゃっ!」

危なく顔面にぶつかるところだった。すんでのとこでかわしたけど、驚きのあまり心臓がバクバクしている。

な、何!? 何が入ってきたの?

「変な声が聞こえましたが、どうしました?」

「ま、窓開けたら、何か入ってきて……!」

広い部屋をキョロキョロ見回すと、ゴキブリが壁を這っていた。

な、なんだ、ゴキブリか……ビククリした。

「よりによってゴキブリ……最悪な害虫を入れてくれましたね。なぜ網戸が付いていない方の窓を開けるんですか?」

「あ、ごめん、本当だ。うっかり反対側の窓開けちゃった!」

瑛知さんは面倒くさそうに辺りを見回し、新聞紙をクルクルと丸めた。それを対ゴキブリ用の武器にするつもりなのだろう。

「……というか、たかが虫ごときでキヤーキヤー騒がないで下さいね? そういうあざとい仕草は、全く可愛いと思えませんから!」

横目でジトリと睨まれて腹が立った私は、瑛知さんが持っていた新聞紙を奪った。

「は!? あなたに可愛いと思われても、ちっとも嬉しくないから! 想像しただけで寒気がするし! ……おりゃっ!」

ゴキブリに殺意を感じさせないように素早く近づき、スパーンと叩いてやった。

虫なんて怖くない。家で虫が現れたとき、退治するのは私の役目だったのだ。

床に落ちていた絶命したゴキブリを、厚めに取ったティッシュで回収して、ビニール袋の中に閉じ込める。そして新聞紙と一緒にゴミ箱へ放り込んで一丁上がり!

「たくましいですね……」

「女が全員虫を怖がると思つたら、大間違いだし！」

「どうだ見たか！ というようにふんぞり返ると、瑛知さんがフウ、とため息を零した。」

「どうやら、性別を間違えて産まれてきたようですね」

「はあああ!? あんたも新聞紙で引っぱたかれて、ゴミ箱に捨てられたいの!?」

食つてかかると、瑛知さんは口元を綻ばせた。

「……ふふ」

なんか嬉しそう!?

こ、こいつ、もしかして、叩かれたり、なじられたりするのが好きなタイプなんじゃ……

「き、気持ち悪いから、変なタイミングで笑わないでよ！」

若干引きつつもさらに攻撃すると、瑛知さんはまた口元を緩めた。

「ふふ」

ま、ま、また笑つてるー!

本当に変な性癖があつたら、どうしよう！ 縛って欲しいとか言われたらどうしよう！

「き、気持ち悪っ！」

思わず零れてしまった本音を聞いた瑛知さんは、またまた嬉しそうに笑つたのだった。



そして決戦当日の日曜日――

私はお水すら喉を通りそうにないほど、複雑な心境にあつた……と思つていたのだけど。

「はー……美味しかった！ お店のラーメンよりも美味しかった！ 私、スープを全部飲み干すのつて、初めてかも」

じっくり煮込まれた豚骨スープ、口の中でトロトロに溶けるチャーシュー、絶妙な味付けの半熟卵。これは料理じゃない！ 芸術！ ……と称したくなるほどの美味しさだった。

「そうですか。それにしても、貴女はよく食べますね。見ていて気持ちがいいですよ。食後に桃のジェラートも食べますか？」

「も、桃!? 食べるっ！」

美味しすぎる昼食に、複雑な心境だったことなど忘れてしまった。

満腹になったお腹を撫でていたら、瑛知さんが意味深な笑みを浮かべた。

「脱がせたとき、そのお腹がどれだけ膨らんでいるか楽しみですね」

「……ん、な……っ!?!」

夢見心地の気分から真つ暗闇の現実を引き戻されて、絶句する。

こんな奴に私の裸をどう思われようと、関係ないし!

と思いながらも、部屋に戻った私はフンフン鼻息を荒くしながら腹筋をしていた。

やっぱりあいつにだらしのない体だと思われるのは、腹が立つ!

「ふ……ぐつ……ふううー……つ……き、きついいいー……！」
五十回やったところで、体力が尽きた。

「こ、これくらいで……十分、でしょ……お水飲みたい……」
ヨタヨタしながらキッチンへ向かうと、瑛知さんがまたシステムキッチンの柵と睨めっこしていた。

「やはり、柵に仕切りが欲しいですね。もう二つ……いや三つほど……」

瑛知さんはリフォーム会社のチラシを手持っている。

柵にはたぐさんの鍋や、調理器具がギュウギュウに詰まっております、無法地帯の様相を呈していた。

「……もしかしてこの前から悩んでいたのって、それ？」

瑛知さんはため息をつきながら、渋々振り向いた。

「うざったいから、構わないで下さいと言ったはずで……いや、まあ……同居しているのですから、いきなり業者が入ってきたら驚きますね。この柵に三つほど仕切りを付けてもらおうと思っております」

「ふうーん……」

「工事の日程が決まったら、改めてお知らせしますのよ」

見た感じ、業者を呼ぶほどのことではなさそうだ。

一度部屋に戻り、工具箱と木材を持って、再びキッチンに向かう。

「何を始める気ですか？」

瑛知さんが驚いた様子で私を見ている。

「仕切り作るんでしょ？ それくらいなら業者を呼ぶ必要なんてないよ。私が作る」

「夏奈さんが？ ……破壊する気ですか？」

思いつき訝しげな目で見られたものだから、少しムカツとする。

『作る』って言うてるでしょ。いいから、あっち行って。気が散るから」

半ば強引に瑛知さんをキッチンから追い出し、鍵を閉めて仕切り作りに取りかかった。

これで邪魔者は入ってこれない！

「よーし、やるぞー！」

ちょうどキッチンの柵に使われている木材と似た物があったので、それを使うことにする。今、なんかノックされた気がするけど聞こえなかったフリ！

「………完成！」

仕切りは何度も作ったことがあるから、三十分ほどで完成した。

これで無法地帯は解消できると思うけれど、柵の中はもういつぱいだから、もしまた新しい調理道具を買ったら、確実に溢れるだろう。

ということ、キッチンに合いそうな木材を選んで、新しい柵を作ってみた。

柵には扉も付けたから、収納したあとに閉じれば、生活感も出ないはず。

趣味の時間に没頭できたことで久しぶりに癒された。手持ちの木材も少なくなってきたし、近々

ホームセンターに行つてこなきゃ！

片付けを済ませてキッチンのドアを開けると、瑛知さんが仁王立ちしていた。

「ひゃっ!? ちょ、ちょっとビックリさせないでよ」

「立てこもり犯め。よくも俺の聖域を人質に取ってくれましたね?」

「人聞きの悪いこと言わないでくれる? 柵も作っておいたよ。あの様子じゃ、すぐに入りきらなくならそうだったから」

できたての仕切りと柵を指差したら、瑛知さんは目をまん丸くした。

「……これ、本当に夏奈さんが作ったんですか?」

「私以外に誰がいるの?」

なんだか、前にも同じような会話をした気がする。

瑛知さんは私が作った柵と仕切りをまじまじと見つめ、感心したようなため息をついた。

「なぜこのようなことができるのですか?」

「こうやって簡単な家具を作ったり、既製品を自分好みにリメイクしたりするのが、私の趣味なの」

「……ずいぶんと男前な趣味ですね。やはり性別を間違えて産まれてきてしまったのでしょうか」

このトンカチで、釘じゃなくてこいつの頭をゴンゴン打ってやりたい!

「う、うるさいな! とにかく、何もしないで住まわせてもらうのは気が引けるし、家具関係で困ったら、遠慮なくいつでも言って」

これ以上ここにいたら、またイライラしそうだから、さっさと退散することにした。



夕食はオムライスだった。

自家製ケチャップで作ったご飯が、チーズ入りの半熟ふわふわ玉子に包まれていて涙が出るぐらい美味しい。というかちよつと出たかもしれない。

付け合わせのポテトサラダはまるやかで優しい味がして、野菜がたっぷり入ったコンソメスープは野菜の甘味と厚切りベーコンの塩加減が絶妙。

「はあ、美味しかった……なんで性格悪いのに、こんな優しい味の料理が作れるの?」

「料理は化学のようなものです。調味料を正確に量り、実験を繰り返してよりよい味に作り上げていくのですから、性格の良し悪しは関係ありません」

「性格悪いのは、否定しないの? まあ否定されたところで、気持ちは変わらないけど」

皮肉を交えてツッコむと、瑛知さんは形のいい口の両端を上げた。

「ええ、自分でも性格悪いと思ってますから。とはいえ、この性格で楽しく生きているので、反省する気や直す気は、全くありませんけどね」

瑛知さんは爽やかに微笑む。

「ああ、そう……」

き、聞かなきゃよかった……

食器を片づけて部屋へ戻ろうとすると、瑛知さんに呼び止められた。

「二十二時頃、部屋でお待ちしています」

意味深な笑みを浮かべられ、心臓が大きく跳ね上がる。

「……っ！」

ついに、決戦のときが来た……！

「逃げてでも無駄ですよ。夏奈さんが来ないなら、俺自ら貴女の部屋へ行つて、仕込ませて頂きますから」

「に、逃げないし！ あと変な言い方しないでつて言ってるでしょっ！」

目を逸らしたくなるのを堪えて睨むと、瑛知さんは楽しそうに口元を綻ばせた。

余裕な態度以上に、嫌味な物言いが腹立つ！



お風呂で汗を流した私は、色気の欠片もないベージュの下着を身に着けた。

「ふん！ この下着でも見て、萎えてしまえ！」

でも……

『粗末な下着ですね。でも、夏奈さんにはピッタリですよ。粗末な下着が似合うコンテストがあったとしたら、優勝間違いなしですね』

瑛知さんが口にしそうな皮肉が脳裏を過り、ピキッとこめかみに青筋が浮かぶ。

「……やっぱやめておこう」

あいつのために可愛い下着を身に着けるなんて癪に障るけれど、馬鹿にされるのはもつと腹が立つ。

部屋に戻った私は、すぐにクローゼットの中から一番お気に入りの下着を取り出し、着け直した。淡いピンク色の小花柄で、フリルが付いた上下お揃いのものだ。

結婚話が持ち上がる前に一目惚れして買ったこれを、異性の前でさらけ出すことになるとは、夢にも思わなかった……

「これで嫌味は言われなくていいでしょう。……たぶん！」

タオル地のピンク色をしたボタン付きワンピースを着て、全身鏡の前でクルリと回る。

準備OK！ 変なところはない……はず！

二十二時はもうすぐ。緊張のあまり喉が渴いてしまう。

「落ち着け……落ち着け……。よ、世の中の彼氏や旦那がいる女性は、みんな通ってる道……だし……」

病院で苦手の注射を打たれるのを、今か今かと待っている状態にちよつと似ているかも。

——初体験は、いつか大好きな人とするの……うふ。

……なーんて、ロマンティックなことを夢見ていたわけじゃないし、そもそも恋愛なんてするつもりもサラサラなかった。だけど、まさか好きでもない……むしろ大嫌いな奴と初体験を済ませることになるとは……なんだか複雑な気分だ。